「依頼型」から「巻き込まれ型」へ

――江戸川乱歩「D坂の殺人事件」草稿覚書――

落合教幸

「D坂の殺人事件」草稿は、二百字詰原稿用紙で六十枚を超え、残された乱歩の草稿のなかでは比較的まとまった枚数のあるものだが、物語の結末までは書かれていない。発生した事件の概要と、探偵が事件調査へ乗り出すまでが描かれている。大正十四年一月に雑誌「新青年」へ掲載された、現在我々が読んでいるかたちの「D坂の殺人事件」とはかなりの相違が見られる。そのため単純に計算はできないが、内容的に考えて、作品の半分程度が書かれていると言うことができるのではないか。

以下、発表された決定稿と草稿とを比較し、どのような変更がなされたのかを検討していく。

〈前半…発見者の変更〉

こよりでまとめられた原稿の一枚目には、本文に使用されているブルーブラックとはことなり、欄外に黒のインクで「D坂の殺人事件」の文字が書かれている。おそらく、原稿を整理する際に書き加えられたものであろう。原稿の枠内にそのタイトルがあらわれるのは四十枚を超えてからになる。

この草稿の前半は、「増野」「菱田」という二人の学生風の男たちが、いきつけの喫茶店から、向かいの古本屋で起こった殺人事件の発見者となるまでが描かれている。

冒頭が失われている可能性もあるが、この原稿束は「若し出来れば、ほんとうだ。若しできればね。僕はきつと君

をあつと云はせて見せますよ」という台詞で始まっている。そして早々に、「君一寸御覧　あすこへ一人の男が出来て来るだらう。あれは本泥棒だよ。」と向かいに見える古本屋の異常が告げられる。

決定稿では、「私」と「明智」にその役割が当てられることになる。二人が犯罪についての会話を交わしながら、古本屋の異常に気付き、「君もきづいている様ですね」という私に、明智が「本泥棒でしょう。どうも変ですね。僕も此処へ入って来た時から、見ていたんですよ。これで四人目ですね」と答えるのである。

しかし、この会話に入る前にかなり長い説明が置かれ、「私」と「明智」という人物とその関係について紹介されることになる。

〈事件発生の時期…回想の導入〉

この草稿では、古本屋の異常に気付くところから小説が始まり、以下、殺人の現場へと急激に展開していく。そのなかで事件の発生した時期についての説明は書かれていない。

これが決定稿では「それは九月初旬のある蒸し暑い晩のことであった。」「当時私は、学校を出たばかりで、」という説明で、過去の話であることを示すことから始まり、「まだ大通の両側に所々空地などもあって、今よりずっと淋しかった時分の話だ」というように、事件は過去の出来事として回想されるように変更されている。

この変更に関しては、一篇の小説としての「D坂の殺人事件」内での効果のほかに、つづく「心理試験」との関連性も考えられるかもしれない。「心理試験」はこの翌月、大正十四年二月号に掲載され、明智小五郎も登場する。「「D坂の殺人事件」を読んだ人は、この明智小五郎がどんな男だかということを、幾分御存じであろう。彼はその後、屢々困難な犯罪事件に関係して、その珍しい才能を現し、専門家達は勿論、一般の世間からも、もう立派に認められていた。」というふうに紹介されることになる。このような展開を視野に入れて、事件を回想するスタイルが導入された可能性もある。

さらに続く「黒手組」（大正十四年三月）には「D坂の殺人事件」で登場した「私」と同じ人物が語り手であると想定できる記述もある。「私も犯罪とか探偵とかいうことには人並み以上の興味があり、「D坂の殺人事件」でも御承知の様に、時には自ら素人探偵を気取る程の稚気も持合

せているのですから」、というかたちで触れられる。そして事件に巻き込まれた伯父に「私が日頃明智の探偵的手腕についてよく話をしていた」と、明智との関係も続いていたことが示され、この探偵が呼び出されることになるのである。

大正十三年、乱歩は、「D坂の殺人事件」原稿を「新青年」編集長森下雨村に送る。森下から短篇の連続掲載をすすめられ、「黒手組」（三月号）、「赤い部屋」（四月号）、「幽霊」（五月号）、「白昼夢」「指輪」（七月号）、「屋根裏の散歩者」（八月増刊号）と続くことになる。乱歩の回想によれば、その中で「D坂の殺人事件」「心理試験」「黒手組」までが、大正十三年中に執筆されたものとなっている（「探偵小説四十年」）。そのような意味で、この三作品の結びつきは相当強いものと言えるだろう。

「心理試験」では、事件を担当する予審判事が、明智の知合いであり、そのもとを明智が訪ねて、取り調べを手助けすることになる。探偵と事件とのかかわりが、司法関係者の知人を通じたものになっている点で、「D坂の殺人事件」草稿と共通している。

またミュンスターベルヒの心理学が重要な役割を果たしていることも、「D坂の殺人事件」「心理試験」両作に共通している。これは「D坂の殺人事件」末尾に「作者附記僅かの時間で執筆を急いだのと、一つは余り長くなることを虞れたためとで、明智の推理の最も重要なる部分、聯想診断に関する話を詳記することが出来なかったことを残念に思う。しかし、この点はいづれ稿を改めて、他の作品に於て充分に書いてみたいと思っている。」と予告されていたものが、「心理試験」で試みられているということだろう。このように、「心理試験」という作品は「D坂の殺人事件」と非常につながりの深いものとして見ることができるのである。

「D坂の殺人事件」が書き改められた際に、「黒手組」以降についてはともかく、少なくとも「心理試験」の構想が視野に入っていた可能性はあり、それによって、事件の発生時期や、それに探偵がどのようにかかわるかなどが、連作を前提として調整されたということも考えられるかもしれない。

〈三人称から一人称へ〉

ここで三人称から一人称への変更がなされていることにも注目したい。草稿段階では、読者は増野・菱田という発

見者に沿うかたちで事件を見ていくことになる。それが、後半部で一転して小林刑事と明智の対話場面に移り、前半部で名探偵でもありえた小林刑事が、明智へ事件を持ち込む依頼者・捜査の補助者としての役割を果たす人物であることが示される。決定稿では、小林と明智のあいだでこのようなやりとりはなく、草稿の後半部で小林が果たしていた明智の観察者としての役割は、「私」に当てられることになる。

これにより、小説の冒頭から結末まで、読者は「私」の視点から事件を見ていくことになり、結末における鮮やかな事件の解決を、驚きをもって受け取ることになるのである。

〈前半から後半へ…展開の順序〉

さて、草稿の四十二枚目までは事件の発覚から捜査の開始までが描かれているが、物語はここでいったん区切られることになる。四十三枚目には、「D坂の殺人事件」のタイトル、「江戸川乱歩」という作者名が書かれ、文字も丁寧なものにあらたまって書き始められている。この後半の書き始められ方のみを見た限りでは、ここが作品の冒頭となる可能性もあったことが想像される。まず小林刑事と明智探偵の対話があって、そののちに、どちらかの人物の語りなどによって事件の概略が読者に提示されるというという順になっていたかもしれないのだ。

しかし、四十九枚目のあたりではすでに、先に綴られた部分を前提とした記述が見られる。「読者の想像の通り小林刑事というのは前章に出て来て機敏な動きをした警視庁の刑事だ。彼はその夜の一部しじうを詳細に話した」。つまりこの段階では、前半に置かれる記述との接続が決まっていたことになるだろう。

〈後半…先行作品への言及〉

探偵のもとに事件が持ち込まれる。このようなかたちは、先行する探偵小説作品にすでに多用されているパターンでもあった。草稿の後半は、警視庁の小林刑事が、明智の下宿を訪ねるところから始まっている。

寝ぼけながら明智が口にする、「スフィンクス」「Thou art the man」（おまえが犯人だ）はともにポーの作品タイトルである。起床した明智は小林刑事の話を聞くことになるのだが、その明智の姿を刑事は「ホームズ気取りだぜ。」

と評する。さらに「ポーのモルグ街の殺人やルルーの黄色い部屋を思出すぢやないか」というような記述も見ることができる。

決定稿ではさらに、コナン・ドイル「スペックルドバンド」（まだらの紐）や谷崎潤一郎「途上」への言及も加わってくる。

思えばポーの「モルグ街の殺人事件」でも実在の探偵ヴィドックへの言及があり、ドイルによるシャーロック・ホームズ作品の第一作「緋色の研究」でも、先行するポーの探偵デュパンや、ガボリオの探偵ルコックへの言及があった。ガストン・ルルーの「黄色い部屋の謎」にもホームズへの言及がある。そして、のちに乱歩に影響を与えることになるモーリス・ルブランのルパンものでも、ホームズをはじめとする先行作品あるいは探偵に触れる記述がなされる。

先行する探偵小説や探偵への言及という、探偵小説の特徴的スタイルは、谷崎の作品などにもあるものだが、日本の名探偵を代表する存在となっていく明智小五郎が初めて登場するこの作品でも、使用されているのを見ることができるのは興味深い。

〈「依頼型」から「巻き込まれ型」へ〉

先に触れたように、草稿段階で事件の発見者として設定されていた二人の人物が、決定稿では明智と語り手になっている。

探偵の登場の仕方が変更されたことによって、決定稿では、明智小五郎という人物がはじめから名探偵として登場するのではなく、その素性は伏せられ、いったんは容疑者として意識されることになる。被害者である古本屋の細君と幼馴染であった人物として登場し、絶対に発見されない犯罪というのも可能であるとも口にする。逃げ道のない密室的な状況のなかで、明智の指紋のみが採取される。そして目撃者が犯人の着物を黒とも白とも証言したあと、明智の棒縞の着物が印象付けられて前半部（上）は終わる。

草稿と決定稿のもっとも大きな違いはおそらくここではないか。

決定稿では、下宿を訪れた「私」に明智は「よく訪ねて呉れましたね。その後暫く逢いませんが、例のD坂の事件はどうです。警察の方では一向犯人の見込がつかぬようではありませんか」と歓迎を口にする。一方草稿では、小林刑事に「何だ。又知恵を借りに来たのか。見つともない。

止せよ。警視庁の名探偵が、俺見たいなすかんぴんの、書生つぽの所へ相談に来るなんて」とまったく別の反応を示していた。

こういった箇所には、決定稿とはことなる明智の性格を見ることもできる。草稿では「僕」ではなく「俺」という一人称が用いられていて、訪問者にぶっきらぼうな態度で接する。小林刑事の「君と知合になつてから俺の手柄の半分は君のお陰だ」という台詞があるように、明智は小林刑事を助けて、すでにいくつもの事件を解決に導いていたことになっているから、二人の親密さを示すものとも取れる。しかしさらに、「マドロスパイプに刻み煙草をつめ込んで、スパスパやり出した。刑事は「又始めやがつた。気障だな。ホームズ気取りだぜ。年が若いから仕方がないが」」という記述もあり、そこから、明智はよりクセのある、自己主張の強い人物として描かれていった可能性も考えられるのではないか。

新聞で読んでいたD坂の事件について、小林から補足説明を聞くうち「今度は降参かね」と煽られれば、明智は「馬鹿云え。俺の字引には不可能といふ文字はない」というように応じている。そして、「君一つやつて見ないか。便宜は図るよ」と言われると「ウン、やつて見るかな」という具合に事件へ乗り出すことになるのである。

探偵に事件が持ち込まれる、草稿のこのようなパターンを「依頼型」とすると、決定稿では「巻き込まれ型」になっていると言えるだろう。偶然にも事件の発見者となったというだけではなく、古本屋の細君との関連なども設定され、関係性が強められてもいる。さらに、明智自身は意識せず捜査を進めてはいるものの、「私」によって犯人の疑いすらかけられてしまう。

明智が名探偵として活躍することを知っているその後の読者にとってはともかく、雑誌掲載時の読者にとっては、犯人である可能性をもった人物が、鮮やかに事件の謎を解いてみせるという展開には、劇的な効果があったはずだ。「依頼型」から「巻き込まれ型」への変更は、明智小五郎の登場にこのような印象を付与することになったのである。

「D坂の殺人事件」の明智について必ず言及されるのは、「一ぺん切りで止すつもりのが、誰彼に『いい主人公を作り上げましたね』と云われるものだから、つい引続いて小五郎物を書く様になった。」（「探偵小説十年」）という乱歩の言葉である。しかしこの草稿のような「依頼型」が当初予定されており、それが「巻き込まれ型」へと変更されたことなどを考えると、その乱歩の回想への信頼性は少し揺

らぐことになるのではないかと思う。明智小五郎は名探偵として準備されていたのだ。

決定稿の引用は光文社文庫「江戸川乱歩全集　第1巻　屋根裏の散歩者」による。

（立教大学大学院博士後期課程・立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター勤務）

投稿規程

一、投稿に資格制限はありません。
二、テーマは大衆文化に関するもの。
三、枚数は四〇〇字詰め原稿用紙換算で、二〇枚程度。
四、採否は編集委員会で決定します。
五、投稿は随時受け付けていますので、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター宛てにお送り下さい。なお原稿はお返ししません。